水が誘う

夏彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水が誘う

【Ｎコード】
Ｎ７８６１Ｃ

【作者名】
夏彩

【あらすじ】
毎日退屈な日々を過ごす小学五年生「神岡正悟」。夏休み前日までいつもと同じ日々を過ごしていたがその夜に流れ星を見たことから不思議な夏休みが始まる。

前日までの僕

白い壁には巨大な影が映し出されている。

ゆらゆらと蠢くその影は右から左へ何度も何度も羽ばたいている。壁には蜘蛛の巣がまとわりつき蜘蛛たちが遅い夕食にありついていた。その様は人間から見ればよくあるその風景も虫たちから見ればまさに地獄絵図なのかもしれない。そこに行けば間違いなく食われてしまう。しかし、その白い壁には自分たちを惑わす淡い光が反射されていて行ってはいけないと知りつつも本能がそれを許さない。あの白い壁を見てしまったからには自分たちは蜘蛛に食べられる運命にあるのだろう。虫はそこまで考えていないだろうが、あの蜘蛛の巣に捕まりもがく姿は必死で生きようとしているように思えた。白い壁に向かって行くのも本能なら蜘蛛の巣から逃れようとするのも本能だろう。

（生きるためにもがく。そんな本能は僕にあるんだろうか？）

そんなことを考えても誰も答えてくれない。あると信じたいがそれを試すことは自分の人生のなかには無いだろう。

首筋に虫が当たり、ふと振り返る。外灯の回りを蛾が羽ばたいていた。白い壁の影の正体はこいつだった。外灯の強い光の虜になってしまったこの蛾はわずか5メートル後ろで惨劇が起きているとは思いもしないだろう。

僕は惨劇の横のドアに入り、階段を5階まで上り、表札に「神岡八重」と書かれた水色のドアを開けて我が家へ帰った。

「正悟くんおかえり。」

八重ばあちゃんが迎えてくれた。今年で８０歳になる八重ばあちゃんは親を亡くした僕を引き取り年金で養ってくれている。でも最近は足腰が弱くなり階段を下りることがなかなか出来ず夜の買い物は僕の役目になっていた。

「いつも悪ぃごど。ばあちゃんがもっとしっかりしてればねぇ。」
晩御飯の支度をしながら八重ばあちゃんはいつもと同じ言葉をつぶやく。
だから僕はいつもと同じ言葉で返す。
「大丈夫だよ。僕も五年生だからちゃんと買い物できるよ。八重ばあちゃんも階段を下りるのが大変なだけで寝たきりじゃないから友達とも遊んでられるし。気にしないで。」
その言葉を聞くと八重ばあちゃんはいつもと同じと安心して何も無かったように晩御飯を作り出す。今日も焼き魚と野菜サラダ。いつもと同じ。
僕は毎日が退屈だった。もちろん八重ばあちゃんには感謝してるし、退屈だから不良になるなんてことも無かった。しかし、毎日退屈していた。些細な違いはあっても心に響くようなことは無い。僕は自分は冷めた人間なんだとあきらめていた。
明日からは夏休み。隣の公園に行けば和隆や学実が来るだろう。でも、和隆はスポ少で来ないかも。いつもと同じ夏休みでもあの二人と遊ぶのは楽しい。それだけが退屈な夏休みの唯一の救いだと思う。
夜８時になったから八重ばあちゃんは寝る。僕はヘッドホンをして映画のＤＶＤを観る。そしてお気に入りの忍者漫画を見て僕も寝る。
いつもと同じ夜のはずだった。

1日目。その1

午前2時。明日から夏休みのせいか寝付けずに夏休み1日目を迎えてしまった。
僕は八重ばあちゃんを起こさないようにゆっくりと起き、冷蔵庫の牛乳をパックから直接飲む。
寝る前にベランダに出て夜の町を見た。団地の5階から見る町並みは午前2時にもなれば真っ暗で、外灯の明かりだけが夜空から星の光を奪っていた。しかし、外灯だけで奪えるほど弱い星は少なく晴れた夜空は綺麗な星空を映している。
ある映画で（こんなに星があるんだから宇宙人が居ないなんてさびしいじゃないか）なんて事を言っていたけど、この星の光はその星が爆発した光が何万光年も経ってから地球に届いているんだからとっくに宇宙人は滅んでるんじゃないかと僕は思っていた。
流れ星を見つけた。何かお願いすることはないか考えたが、考える時間を与えてくれるほど流れ星は光ってくれない事を思い出しただじっと見ていることにした。
結構光っているのでお願いすればよかったと後悔した。
ふと、流れ星から別の光が地面に落ちたような気がした。
外は時々通る車の音ぐらいでかなり静かだったが特に大きな音も無かったからたぶん気のせいだろう。でも、落ちたのは市内の私立高校の裏山の方角だった気がする。明日、和隆と学実の二人がいたら誘って見に行こう。もしかしたら隕石があるかも。
僕はとりあえず寝ることにした。もしかしたら、夜のうちに誰かに取られるかも知れないけど別にいいや。二人と裏山に行くことが目的なようなもんだから。

午前7時。いつもと同じ目玉焼きと納豆ごはんを食べているとドア

の呼び鈴が鳴る。
「僕が出るよ。」
そう言ってドアを開けると和隆が目をギラギラさせて立っていた。
「おはよ。どうしたの？こんな朝早くから。」
和隆は僕が話し終えると同時に話し出した。
「学実が朝に変た子供どご見かけたんだど。居ねくなるかも知れねからお前も早く来いよ。」
和隆は自分の話が済むとこちらの返事も聞かずに階段を下りていった。
いつも和隆は一方的に話し、すぐ行動に移る。落ち着きが無いのだ。しかし、その行動力はリーダーシップを発揮しみんなを引っ張っていく力になってるようで、僕は女子から和隆宛ての手紙を何度も渡されることになっている。和隆本人は女子と付き合うとかあまり興味が無いようで、その手紙の返事は決まって「ごめんなさい」だった。そんなところも和隆の魅力だった。
僕は急いでご飯を食べて和隆を追った。和隆は以外にもすぐ近くにいた。そこは3階の階段の公園の見える窓際だった。和隆の隣には学実がいた。
「おはよう。見れ、正悟。あいつだ。さっきから公園の中どごうろちょろしてらんだで。」
学実は朝ごはんなのかおにぎりを食べながら上目遣いで話した。学実のうちは共働きで父親は夜勤、母親は早朝の仕事をしていて、ほとんどの朝ごはんはおにぎりだけだという話を前に聞いたことがあった。たぶん、去年と一緒で朝ごはんを食べながら公園をぶらぶらしてたんだろう。学実の父親は学実や母親に暴力をふるっているようで学実は日中に家に居るのを嫌がった。そんな父親を持ったせいか何かを観察することに学実は長けていた。
「正悟も早く見れば。」
僕は公園にいるその子供を見た。見たことない子供だった。身長からすれば歳は僕らと同じくらい。この夏休み真っ盛りに長袖のボー

ダーシャツに黒いズボンをはいていた。服装は男っぽいが髪は肩まであるから女の子かもしれない。
「この夏休みにあの格好はないよな。」
僕らは全員半そでだった。
「とにかく近くさ行ってみよで。」
そう言って和隆は階段を下りていく。僕と学実も続く。

僕らが階段を下りて公園に着くと和隆はその子供と話をしていた。近くで見るとその子供は女の子だとはっきり分かった。りりしい眉はしているが二重の大きな目をしたかわいい女の子だった。だから僕らは驚いた。和隆は女の子とはほとんど話しをしないからだ。僕らが近づくと和隆が気づいてこっちを見た。
「見れ。懐かしいべ。エリだで。昔ここの団地さ住んでだべった。」
見るとそのエリという女の子はこっちを見て微笑んでいた。
僕はとまどっていた。僕はこの子を知らないからだ。僕はこの団地に小学2年生から住んでいるけど見た覚えが無かった。そもそも、和隆は小学4年生のときにこの団地に越してきたから和隆が知ってる子供なら僕らだって知ってるはずだ。なぜ、和隆が知っているのに僕はこの子を知らないんだろう。学実を見ると学実も何か考えているようだった。学実は生まれたときからこの団地で住んでいる。その異常な人間観察で団地に来たことがある新聞勧誘員でさえ顔を覚えている。学実はこっちを見て首を横に振った。学実も知らないようだ。
僕らがそのエリという女の子をまじまじと見ているとそのエリという女の子は和隆の首の後ろに右手を伸ばして和隆に向かって話し始めた。
「駄目よ、和くん。私とあなたが会っていたのはここに引っ越してくる前の話でしょ。」
その声は綺麗で話し方は大人のようだった。
「・・・・。あぁ、んだったな。」

和隆は目が半開きになりボケているような顔をしておどけていた。
しかし、それは一瞬ですぐにいつもの和隆の顔に戻った。和隆はいつもの調子で僕らにエリとの昔話を始めた。前の学校ではいつも一緒に遊んでいたことや家が隣同士だったことなど和隆にしては珍しいくらい女の子の話をしていた。もしかしたら、和隆がクラスの女子からの手紙を受け取らないのはこの子を今でも好きだからじゃないかなと思えてきた。
「それでな、昨日流れ星が振ったよな。見た奴いるが？」
和隆の問いかけに僕は今日の予定を思い出した。
「そうだ。昨日の流れ星が高校の裏山に落ちたかも。今日、探しに行こうよ。」
「私も行ってもいいかしら？」
エリが僕を見つめて話す。
「も、もちろんだよ。な、学実？」
学実は返事をしない。そういえば学実の様子も変だ。いつもなら和隆の話に笑ったり返事をしたり楽しそうにしているのに今日は静かにしている。まるでエリを観察しているようだ。でも、それはそれでいつもの学実らしかった。見知らぬ人とは話をしたがらないからだ。
和隆はそれには気づかない様子で学実に話かける。
「いいべ、学実。行こで。今から出発だ。エリは自転車持ってきてらが？」
「私、持ってないわ。」
「せば、俺の後ろさ乗せてやるよ。」
クラスの女子が見たらなんと言うだろう。
僕たちは自転車で裏山に出発することにした。

1日目。その2

自転車は軽快に歩道を走っている。
先頭には和隆と後ろに座ったエリ。その次に僕、そして学実が続いていた。
エリは和隆に何かを話しているようだったが、時々僕らのほうを見て微笑んでいる。僕はどういう反応をすればいいのか分からないので目を背けた。

高校の前の交差点は赤信号だったので僕らは止まって青信号になるのを待っていた。
僕は学実と並んで立ち、和隆とエリが何を話しているのか聞いていた。
内容は昔もこうして自転車の後ろに乗せてもらったとか、和隆の今の暮らしや街のことなどたわいも無いことを聞いていた。僕は学実に話しかける。
「和隆もあんなかわいい女の子と知り合いだったなんて知らなかったな。学実は知ってた？」
「知るわけ無ぇべ。」
学実は少し怒っているような感じがした。かわいい女の子の友達が居ることに怒っているのか、それを隠してたことに怒っているのかは分からないが、学実が言葉少なげに怒りをためているときは何も言わないことが正解だった。でも僕は怒る学実の気持ちが分からなかった。和隆はあんなにもてるのにいつも僕ら二人のようなクラスでも目立たない同級生と遊んでいたし、クラスの女子からの手紙も受け取らないのでもしかしてホモなんじゃないかと疑ったこともあった。でも、ああして仲のいい女の子がいるということは和隆はホモじゃなくて僕らを本当に友達だと思っているんだという感じがして僕はうれしかった。

信号は青に変わり、僕らは裏山へと登った。自転車は裏山の神社の境内に置くことにした。
「さぁて、どっから探せばいいべな。」
僕らは神社の周りを探してみたが隕石が落ちたような場所は見当たらない。
1時間ほど神社を中心に探してみたけどおかしなところは無く、ぼうぼうに生い茂った雑草や獣道、キズだらけの大木などいつもの風景だけがそこにあった。エリは少し退屈そうにしていた。和隆はエリそっちのけでそこらじゅうを探しているし、学実は退屈そうなエリを睨んでは怒りを溜めていた。
「やっぱり見当たらないなぁ。こっちじゃなかったのかな？」
退屈で険悪で嫌な空気に耐えられなくなった僕は何か話してないと落ち着かなかった。
「こっちだと思ったんだけどな。僕らの団地があっちだから方角はあってると思うんだよね。もしかして隕石は小さいと思ってたけど実はもっと大きくて場所もずっと向こうに落ちたのかな？それとも隕石じゃなくて何かの見間違いだったのかな？ぜんぜん見つからないよ。」
僕の独り言だけがあたりの空気に流されていく感じがして、また気持ち悪い空気になった。
いつの間にか太陽は真上にきていた。

僕は疲れていた。昨日まではここにこうして二人と来ることを楽しんでいたのになぜか今は早く家に帰りたかった。和隆は一言も話をしないで黙々と探してる。まるで自分の大切なものを探してくらい熱心だ。隕石探してる途中で自分のものを落としたのかもしれない。学実も探しているけど時々エリを睨んでる。なんでそこまでエリを怒る必要があるんだろう？エリはもう探してなかった。神社の階段に座り足元の石を見ているのか下を向いたままだった。はやく和隆

に「もう家に帰って昼ごはん食べようで。」と言って欲しかった。なんだかおなかも空いてきた。もう何を探しているのかあいまいな感じがしてきた。僕は疲れていた。とりあえず学実のところへ行ってみよう。何か話してないとこの罰ゲームのような場所にはいられない。

「学実、見つかった？」

「見つかったらこんなところにいねぇよ。」

学実はまだ怒っているようだった。眉をひそめてこっちを見ようともしない。僕は小声で学ぶ実に話続ける。

「なぁ、学実。なんで怒ってるのか分からないけど何だか嫌な態度がでてるよ。どうしたの？」

「怒ってねぇよ。」

「怒ってるって。」

「違う。怒ってない。」

「だってエリが来てから何だか変だよ。ずっとエリを睨んでるし。絶対今日の学実は変だって。」

「違うんだって！俺は・・・」

急に学実は起き上がり大きな声を張り上げた。しかし、何かを言おうとしたけど止め、またしゃがみこんだ。学実の顔は泣きそうな顔になっていた。

「ごめん学実。大丈夫？」

「大丈夫。それよりエリを見てけれ。こっち見てるんでねが？」

僕はそっと振り返った。エリがこっちを見ていた。しかし、あの笑顔は無く、ただじっと見ている。怖い。そんなイメージを持つような顔だ。漫画風に言えば顔は普通でも禍々しいオーラが出てるようなそんな気配。じっとエリを見ていても変に思われるから顔を背けたかったけどなぜか出来ない。顔を背ければ後ろから食べられそうに感じる。僕はエリから目を離せなかった。

「正悟！」

大きな声にびっくりして声の方を向いた。学実だった。助かった。

正直そんな気持ちだった。
「正悟。俺は・・・」
「どうしたの？」
驚いた。学実が話し始めたときエリが後ろにいた。エリの顔は出会ったときの笑顔になっていた。さっきの顔は何だったんだろう。
「正悟くん。カズくんが呼んでたわよ。」
「本当？でも・・・」
正直僕はここから離れたかった。最初に持ったエリのイメージは消え、今はなんだか悪の女王のような気がしている。学実と二人きりにしたらマズイって気がした。しかし、エリは笑顔に戻ったけれどエリの言葉に逆らうと後で何かされそうで怖い。学実の次は僕だ。そんな気がした。でも学実と二人には出来ないしどうしたらいいんだろう。僕は何が何だかわからなくなってきた。
「早く。カズくん待ってるわよ。」
「でも・・・」
エリの声が怖かった。学実はずっとエリを睨んでいる。僕はどうしたらいいんだろう。
「おーい！のど渇いたー！家さ帰ろうでー！」
和隆だ。和隆の声がした。助かった。
エリは和隆の方に近づいて甘えたような声を出す。
「カズくん。見つかった？」
「駄目だ。ここじゃないかもしれね。すんげのど渇いたから家さ帰ろで。」
「そうね。仕方ないわね。」
エリはすごく残念そうだった。そんなに隕石が欲しかったのかな。ヒーローと気が合うかもしれない。
帰り道。エリはまた和隆の後ろに乗っている。僕と学実は並んで自転車をこいでいた。
学実がぼそりと言った。

「正悟。ありがとな。」
突然の言葉になにがありがとうなのか考えたけどわけが分からなかった。もしかしてさっきのことなのかな。学実が僕の勝手な葛藤に気がついてくれた気がしてうれしくなった。
「なんだか分からないけど気にすんなよ。」
僕はちょっと恥ずかしくてそう言ってみた。
「うん。そうする。」
学実も少し恥ずかしそうだった。
僕らはなんだかまた深く仲良くなれた気がした。

「午後からまた行ってみよで。今度こそ見つかる気がする。」
団地に着くと和隆が話してきた。僕は行きたくなかった。でも断る理由も無いし、エリは和隆には暗黒面を出さないから大丈夫だと思うけど、僕らには和隆のいないところで何かしてくる気がして嫌だった。断る理由をさがしていたら学実が話しだした。
「俺らは午後からヒーローの所さ遊びに行く。」
そうだ、ヒーローだ。まさかこんなところでヒーローが役にたつとは思わなかった。ヒーローが本当のヒーローのように思えた。
「んだが。正悟はどうする？」
和隆のうしろでエリが僕をじっと見ている。
「僕も・・・ヒーローの所に行く・・・。」
答えるのが精一杯だった。エリが怖い。僕は和隆を見捨ててしまった気がした。
「んだが。明日は隕石見せるから楽しみにしてれな。たぶんヒーローもびっくりするで。」
和隆はいつものように笑って家に向かっていった。エリは僕らをじっと見ていたが和隆の後を追って行った。

和隆とエリが見えなくなるまで僕と学実はただ何も言わずに立ち尽くしていた。

「正悟。昼ごはんは正悟の家で食っていいが？んで、一緒にヒーローの所さ行くべ。」
突然の学実の言葉に学実も僕と同じでエリが怖いのかと思ったら学実の表情は僕とは違った思いがあるように見えた。泣きそうな僕とは違い、学実は真剣な目をしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7861c/

水が誘う

2010年10月11日15時04分発行